

不空門下潜真の『菩提心義』について

今井 淨圓

潜真（七一八—七八八）については、『統開元録』・『貞元録』が比較的詳しい。『宋高僧伝』の潜真伝は、ほぼ、それらをそのまま踏襲している。また『表制集』の中にも断片的に潜真に關係する記述がある。

これらの資料により、不空と潜真との關係を窺えば、七六四年の不空自身の上表文である「請_レ置_二大興善寺大德四十_一九員_一制書」の中に潜真の名前が登場することに始まる。さらに、不空と潜真との關係を密接にしたのは、七六五年四月の『仁王經』翻訳に、潜真が証義として参加したことによる。同年六月、不空の有力な支援者から、仏典翻訳事業に対する援助が行なわれたが、潜真はその援助金の管理運営をゆだねられている。七十七年には『大集大虚空藏菩薩所問經』の訳出にたずさわっており、この『虚空藏經』に対して、潜真は、『虚空藏經疏』四巻を著わしている。また同年、不空によって『大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴經』の翻訳がなされるのであるが、この時にも、潜真にその疏を作ることが勅

命され、七七年十一月、疏三巻を完成させて、これを代宗に奏上している。このように、不空と潜真との間には、仏典翻訳事業を通じて、密接な關係にあったといえるのである。また『統開元録』には、

翻經大德潜真。親奉三藏和上。示_レ以_二秘教_一。入_二曼荼羅_一。登_二灌頂_一。受_二成仏印_一。仰_レ諮_二密要_一。

とあり、潜真が不空より密教を学んでいたことは明らかである。したがって、潜真は不空門下の中にあつて、不空の仏典翻訳事業の面で活躍した弟子の一人であり、また事相にも通じた碩学の大德であつたといえよう。

潜真の『菩提心義』は、まず、その冒頭に

菩提心之心成仏之本。發起之相具在衆經。大事因縁莫_レ過_二於此_一。欲_二正修覺_一。不_レ可_二不_レ知_一。

と述べ、菩提心が成仏の根本の因であることを説き、修道の上で発菩提心の持つ意味を強調している。次に『菩提心義』の構成の上で、潜真は、名義・体性・一異・相状・行願の五

門をたてて、菩提心について説明している。

潜真は『菩提心義』の中で行願を明すについて、まず『顯揚聖教論』卷一の文を引用して、世俗の発心とは智者の前で四弘誓願を発することであり、また衆生を利益せんとする利他の面と、無上菩提を証得せんとする自利の面があると説き、修行の方法としては、六波羅蜜をあげている。次に『大日經疏』を引いて、発菩提心とは謂く、決定の誓願を生じて、一向に一切智智を志求することであるとして、菩提心を幢旗や種子に喩えて、その重要性を指摘している。しかしながら、ここでは密教独自の特別な修行方法を説くものではない。

潜真は、更にまた『発菩提心經論』を引用して、菩提心を発すには、十法と四縁とがあると述べているのである。十法とは①善知識に親近すること。②諸仏を供養すること。③善根を修習すること。④勝法を志向すること。⑤心、常に柔和であること。⑥苦に遭つてもよく忍ぶこと。⑦慈悲淳厚であること。⑧深心平等であること。⑨大乘を信樂すること。⑩仏の智慧を求めることであるとする。

その結論として

若人能具如是十法、乃能發於無上菩提之心^一。

と述べている。また四縁とは、①諸仏を思惟して菩提心を発す。②身の過患を觀じて菩提心を発す。③衆生を慈愍して菩提心を発す。④最勝の果を求めて菩提心を発すという四つを

あげている、そして、潜真は『發菩提心經論』願誓品の文を要約して

發菩提心者、先當堅固發於正願。所謂四弘誓願等。立志堅強、作大要誓。常修正行。所謂六波羅蜜等。

と述べている。結局、潜真のいう菩提心の行願とは、四弘誓願をたてて、六波羅蜜等を実践することによって、不退転の位に入ることをめざすものであり、潜真は、これを真發菩提心と称するのである。

次に密教における菩提心の思想的展開を考える上で、まず検討すべきである『菩提心論』と潜真の『菩提心義』とを比較してみよう。

まず『菩提心論』において、菩提心の行相がどのようにに説明されているかを概観すれば、これを行願・勝義・三摩地の三門分別をしている。その中のうち『菩提心論』の行願とは、すなわち、無余の衆生に利益安樂をもたらすことが願であり、また行の内容を利益行と安樂行の二種に分けて説明している。利益行とは方便權教を用いずに、直に真言の妙法をもつて、一切衆生をして無上菩提に安住せしめ、即身成仏の利益を得せしめることである。また安樂行とは衆生の中で機根の劣った者を導くために、方便權教をもつてし、あるいは大悲門の中において、衆生の願望にしたがって、財物等を施して満足を与え、衆生を安心させ、よろこばしめて、漸次に

無上菩提に入らしめることをいうのである。

このように『菩提心論』と『菩提心義』では、同じ行願という用語であっても、かなりその内容に相違があるといえる。それでは『菩提心義』に説かれている行が、主として六波羅蜜であるとする、と、『菩提心論』で説かれる実践行とは何か。それは三摩地段において詳しく説かれているところの月輪観・阿字観・五相成身観という観法である。このような菩提心観の実修を説くか、否かが『菩提心論』と『菩提心義』との大きな相違であるといえる。

また『菩提心論』では、菩提心の勝義とは、一切法の無自性を観することであると主張する。具体的には、その修行の段階を凡夫・外道・二乗・大乘・真言行者に分類するのである。ここで重要であるのは、大乘よりも密教の優位性を述べた部分である。すなわち、

又有衆生^ヲ發^ス大乘心^ヲ行^フ菩薩行^ヲ。於^テ諸法門^ニ無^シ不遍修^ヲ。復經^ニ三阿僧祇劫^ヲ修^ス六度万行^ヲ。皆悉具足^ス。然証^ス弘果^ヲ久遠而成^ス。とあり、『菩提心論』はそうした大乘の修行者に対して、

修^フ瑜伽勝上法^ヲ能^ク從^テ凡入^ニ仏位^ニ者亦超^ユ十地菩薩境界^ヲ。と述べており、真言行者の即身成仏の立場を強調している。

この『菩提心論』における大乘の修行の内容は、『菩提心義』の行願の内容と、ほぼ一致するものといえるものである。その大乘を超えるところに、密教の存在を規定したのが、『菩

提心論』の特色であると窺えるのである。

以上、『菩提心論』と『菩提心義』とを比較検討してみたのであるが、『菩提心義』には、著者は不空門下の人物であるが、密教的な色彩は表われていない。むしろ、通仏教的な立場に立って、菩提心について説明したものと理解できるのである。つまり、潜真は『菩提心論』を見ずにして『菩提心義』を撰述したものと考えられるのである。

また潜真は『菩提心義』の中で、不空訳の『虚空藏経』と『文殊師利経』を引用するから、『菩提心義』の撰述は、これらの翻訳のなされた七一年以降、潜真が入滅する七八八年の間のことと想定できる。この間、潜真は、不空とは、ずっと同じ大興善寺にあって、三藏和上遺書にも署名している。不空が『菩提心論』に関係していたなら、おそらく、何か、知り得た立場にあったのに、『菩提心論』については、何も言及していないのである。

いずれにしても、『菩提心論』の成立年代の上限については設定しがたいが、その『菩提心論』よりも、幾分、先行する形で、潜真の『菩提心義』が撰述され、『菩提心論』が、円照の『続開元録』の成立した七九四年までに不空三藏奉詔訳として、仮託されて成立したものと想像されるのである。

- (1) 大正55・七六〇a。(2) 大正46・九八七a。(3) 大正46・九八八a。(4) 大正46・九八八b。(5) 大正32・五七三a。(6) 大正32・五七三b。(龍谷大学大学院)